

「刀埋めた」伝承の武具見つからず 京都の石塔、移設で調査

京都市南区吉祥院西ノ茶屋町で改修中の「日向地蔵」の地蔵堂で、近くにある石塔が13日に移設され、地中調査が行われた。町内では石塔の下には経(きょう)の文字を書いた小石のほかには武具が埋まっていると伝わっていて、地元住民が興味深げに作業を見守った。

同地域の地蔵堂近くにある石塔は「一字一石大乘妙典塔」と呼ばれている。記録によると、石塔は1858年の建立で、7万字近くある経を一つ一つ書いた小石が納められた。石塔と小石は明治時代に廃仏毀釈(きしゃく)で行方不明になったが、1929年に現在地に戻されていた。地元の西ノ茶屋町内会は約90年ぶりに地蔵堂の改修作業を進めている。

市文化財保護課の職員と住民たちがシャベルやつるはしで地中を掘り進めると直径45センチ、高さ17センチの石の容器が出てきた。中には、「佛」や「若」などの字が墨で記された小石215個と寛永通宝1枚が出てきた。

近所の自営業稲垣克己さん(62)によると、子どもの頃に地域の古老から「鳥羽伏見の戦いに向かう兵が一服する場所で、敗走する際に置いていった刀ややりを埋めたとも聞いたことがある」という。

だが、刀ややりは見つからず、地蔵整備事業実行委員長の小柴美仁さん(59)は「武具はまだどこかに埋まっているかもしれない。地蔵や石塔は地域の文化として長く大切にしていきたい」と語った。

小石は14、15日の午前10時から正午まで現地で一般公開する。



大乘妙典塔の下に埋まっていた小石を掘り出す地域住民たち(京都市南区吉祥院)

【2018年04月14日 12時54分】

Copyright (c) 1996-2018 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します。[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様へ](#)(日本新聞協会) [電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)